

図画工作科における衣服に関する題材開発

-ファッションに基づく視点から-

群馬大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 授業実践開発コース

岩田龍真

1 研究の目的及び背景

(1) 目的

本研究の目的は、小学校図画工作科の授業づくりにおいて「ファッション」を題材とすることで、授業だけではなく日常的に季節感を感じ、生活にある彩りを楽しむことで、自らの暮らしを豊かにすることをしようとする志向を育むことである。

(2) 研究の背景

「ファッション」という言葉は広辞苑第七版（2018）で「はやり。流行。特に、服装・髪型などについていう。また転じて、服装。」とあるが、ここでは「衣服や帽子、バッグ、シューズ、アクセサリ、面や衣装、テキスタイルなど、装いに関することがら」と定義する。教育において服装・衣服に関することは主に家庭科の学習内容として扱われている。小学校学習指導要領家庭科（文部科学省，2017）にはア「衣服の働きが分かり、衣服に関心をもって日常着の快適な着方を工夫できること」、イ「日常着の手入れが必要であることが分かり、ボタン付けや洗濯ができること」と記されている。これは「ファッション」における機能面に着目した学習内容である。しかし、「ファッション」は機能面だけではなく形や色などの造形要素があるため、自己表現の一つとして捉えることもできる。

鷺田清一も「ぼくらの身に付けているものの多くは、身体の保護という機能的な視点からすれば不合理なものがほとんどだ。」述べているように、「ファッション」は機能面だけではない。ここで、ハイヒールを例に挙げてみる。ハイヒールは人間の足の形をまったく無視したフォルムになっている。先は尖り、かかとは棒で押し上げられる形で上に位置している。指も圧迫されるし、安定もしない。機能面からはかけ離れた靴のかたちであるにもかかわらず、見渡してみると様々な場所で見かける。私たちにとって「ファッション」というのは機能面を考えるだけでなく、表現的なものである。私たちの毎日は、衣服（ファッション）が欠かせない。衣服を選択するその瞬間には、造形的要素を選択しているのである。児童にとってもファッションは身近なものであり、そうした生活の中の造形に目を向けるきっかけとしても「ファッション」を題材として取り扱うことの意義があるだろう。また、有川貴子・芳賀正之（2021）は「ファッション」という題材を鑑賞教材として取り扱っている。この論文の研究目的そのものが「生活の中の造形」の美術鑑賞教材の可能性を考察しているため、実践の中に制作活動はあるものの、「ファッション」を鑑賞教材として扱っている事例が多い。しかし、鷺

田清一は「その意味で、ファッションという、このからだの表面で起こるゲームは、社会の生きた皮膚なのであって、そこに各人がそれぞれ〈わたし〉となっていくプロセスが露出しているのだ。」と述べている。鷺田はファッションを「社会を可視化する皮膚」と捉えており、自分を「かたちづくるもの」としている。「ファッション」とは自分と他者・外の世界を繋ぐ皮膚であり、自己表現として自身に密着しながら外界との接面を成すものである。そのため、美術鑑賞教材として扱うだけではなく、実際に「ファッション」として身に付けることでより自分事として捉えることができる。

2 研究の方法と内容

(1) 期日と対象

実践Ⅰについて

2023年7月6日、群馬県A小学校5年1組32名を対象に2時間、表現領域にて実施を行った。

実践Ⅱについて

2023年10月26日、群馬県A小学校5年1組32名を対象に2時間、表現領域にて実施を行った。

(2) 実践内容

①実践Ⅰ「ファッションアイテム」

本実践は、「自身が身に付けたいもの」をテーマに、形や色、制服との組み合わせ方を試しながら、ファッションアイテムをつくり、自分らしさを探るものである。ファッションアイテムをつくる中で、自分のイメージを改めて考えたり、アイテムを身に付けて試したりすることで、自分らしさにせまることができる。つくる行為を自分事として捉えること

は、形や色、構造などを基にした造形的な見方や考え方を、より深く養うことができるのではないか。導入時では、季節の植物を組み合わせでコサージュをつくる。その後、自分のイメージを基に、様々な材料を組み合わせ、身に付けたいファッションアイテムをつくる。事前に植物で試すことで、即興的に形が表せるため、自分のイメージや思いを考えるだけではなく、目の前に存在する“もの”として出会うことができる。そうして出来上がったもの（＝コサージュ、ファッションアイテム）を身に付けることは、制服で過ごす学校生活に彩りを添え、自分らしさを、形や色などの造形言語として表すことができる。

②実践Ⅱ「シーズンウェア」

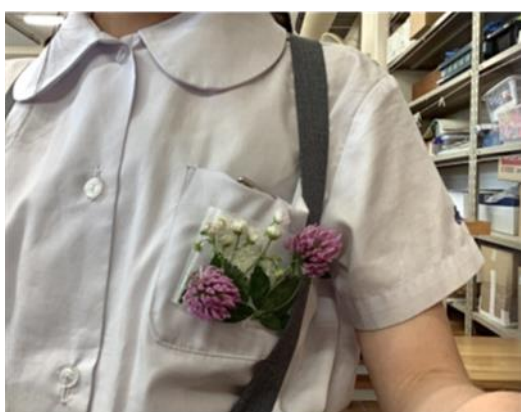
本実践は、「自分が身に付けて楽しいもの」をテーマに、季節感や奥ゆかしさを意識しながら、形や色に自分なりの思いを込めて工夫をし、色の重なりを制服の袖に加えるものである。自分の選んだ色で袖を彩り、その少ない面積に自分を表現することで、制服という社会的な属性に対し、「楽しむ余白」を生み出すことができる。このように、世の中の「余白」に自分なりの工夫を加え、楽しむことが、自己表現であり、図工美術の目指す本質的なものであると考える。自身の好みを理解したり身に付けたりする点から、児童にとっても意義深いものである。また、作品を身に付けて試すことを何度も繰り返すことで、自らが表したものの中に入り込むことができるため、つくること自体をより自分事として

捉えることができる。すると、自身の感覚によって表したものに愛着をもつこともできる。その結果として、形や色、などを基にした造形的な見方や考え方を、より多くの場面で働かせることができると考え、本実践の価値とした。

3 実践結果と考察

(1) 実践Ⅰ：ファッションアイテム

① 学習成果について



写真Ⅰ 児童作品（植物コサージュ）

本実践では、導入時での植物によるコサージュをつくり、次に様々な素材でコサージュをつくる活動を行った。導入の際、児童にとって作品づくりという意識を持ちすぎないように、「選んで貼る」という簡単な作業によってできあがる植物コサージュでの活動にした。それによって児童も多くの植物に触れ、いくつもの植物コサージュをつくっていた。さらに、児童同士でつくりあったり、先生のイメージにあったものをつくっていたり、繰り返してくれるようにしたために、活動の幅が大きく広がっていった。授業中には、児童に対して「自分のイメージってどんなもの？それにはどんなものがあるかな。」と問いかけ続けたことで、「自分のイメージ」とは何かを考える児

童の姿が多くあった。振り返りでは、自身がコサージュを身に付けた状態で写真を撮ることで、「何かを身に付ける」「制服を彩る」という意識を強くすることができた。

② 考察について

実践Ⅰでは、活動量も多い中、最後まで集中して楽しむ児童の姿が印象的であった。しかし、振り返りを見ると「自分のイメージ」という言葉の解釈が難しい児童がほとんどだった。「自分のイメージ」という言葉自体が浮ついているため、自分について改めて考えるというよりも、すでにある「自分のイメージ」をなぞっているように製作していた。児童にとっての自分とは、好きな色や習い事などで止まってしまい、さらにそこから深めることが難しかった。授業中の問いかけでしか深めることができなかつたため、活動自体に自分のイメージを深める仕掛けがあると良かったと考える。

(2) 実践Ⅱ：シーズンウェア

① 学習成果について

本実践では、日本人のファッションにおける季節感との関わりを感じながら、平安時代の十二単にある「重ね」という考え方をを用いて授業を行った。実践Ⅰからの改善点として、造形要素が強すぎず、制服との接着を考えたフェルト生地を素材とした。また、前回同様に児童が何度も試してつくれるようになるべく簡単に接着ができるよう、制服の袖のサイズにフェルト生地を切り、布用の両面テープで重ねるだけの環境設定をした。導入では十二単の重ねについて触れていたた

め、児童も活動内容を理解し、活動量も多い内容であった。



写真Ⅱ 製作の様子

② 考察について

実践Ⅱでは、実践Ⅰでの良かった点や改善点を踏まえながら、よりファッションの視点と結びつけながら授業構想をした。ファッションを基にした衣服に関する題材自体は、形や色、素材感など多くの造形要素を含みつつ、児童にとってより身近で欠かせないものであることから、題材価値が高いものであると考えている。しかし、身近であり、身に付けることが当たり前となりすぎているため、自分について考えたり、ファッションの根幹に触れたりするのは、むしろ難しいのかもしれない。実践Ⅱでは、季節感をテーマに、自身の思いや体験を重ねて自分の想いを色での重ねで表現するという活動を行った。しかし、この「季節感」をテーマに「自分の思い」を表現といった部分が、伝わりにくい児童が多くみられた。児童の振り返りを見ても、季節感と自身の思いを両立して考えられている児童はほとんど見られなかった。ただ、季節感という要素はなくなりつつも、今この瞬間の自分の思いをもって色へのこだわりとしているものもあった。

4 総括

実践Ⅰと実践Ⅱを通して、ファッションを題材にすることの新たな可能性を感じることができた。また、実際に教育現場の中で実践を行うことによって、子どもの安全面や教員としてのやるべきことに注意しながら題材開発を考えられたため、今後自分が教育現場に出る際に考えることを学ぶことができた。特に、日本の季節感と結びつけてみることで、ささやかで繊細なファッションの一面を改めて知ることができ、今後の研究材料としても大きな発見であった。実践Ⅰと実践Ⅱを通じて、子どもの姿はいつも何かを教えてくれることを実感した。子どもと対話をする中で、ハッとしたり、またそんな自分を見直したり、そんな気付きの種を子どもはいつでも私たちに与えてくれる。そういったことを改めて実感することができた実践であった。

本研究を通しては、「身に付ける」ことの可能性を再確認した。図画工作科として何かを表現した時に、自分が表したものを眺めたり、触ったりする中で、自身の表現と改めて対話をする。そこに、もう一つ、「身に付ける」という行為を添えるだけで、より自分に近いところで、よりストレートに自身の表現と対話することができるのである。実践を通して、研究を通してもお、ファッションのもつ「身に付ける」ことの価値を改めて感じることもできた。

引用・参考文献

- 1) 鷲田清一 (2022) 『ちぐはぐな身体ファッションって何?』ちくま文庫
- 2) 石井公成 (2017) 『〈ものまね〉の歴史 仏教・笑い・芸能』吉川弘文館
- 3) 茂木一司・手塚千尋 (2015) 『色のまなび辞典』星の環会